７月予報（全21枚）

病防第２４号
令和６年（２０２４年）６月２７日

各関係機関長　様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
令和６年度（２０２４年度）発生予報第４号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和６年度（２０２４年度）病害虫発生予報第４号（７月予報）

Ⅰ　気象予報：令和６年（２０２４年）６月２７日福岡管区気象台発表
◎向こう１ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要　　素	低　い（少ない）	平年並	高　い（多い）
九州北部全域（含、山口県）	気　　温	１０	１０	８０
	降 水 量	２０	４０	４０
	日照時間	３０	３０	４０

Ⅱ　【今後、注意すべき病害虫】
１　発生の概要

作　物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早期水稲	穂いもち	並	やや少	並(±)	並(±)	気温高(－) 降水多～並(＋)	巡回調査、防除員報告(葉いもち)
	斑点米カメムシ類	多	多	多(＋)	やや多～並(＋)	気温高(＋)	巡回調査（７月調査との比較）
早植え水稲	葉いもち	並	やや多	並(±)	並～少(±)	気温高(－) 降水多～並(＋)	
	トビイロウンカ	やや多	やや多	並(±)	並(±)	気温高(＋)	予察灯調査 誘殺時期やや遅(＋) 誘殺数多(＋)
普通期水稲	葉いもち	並	並	並(±)	やや多～やや少(±)	気温高(－) 降水多～並(＋)	防除員報告(苗いもち)
	トビイロウンカ	並	並	－	－	気温高（＋）	予察灯調査 誘殺時期やや遅(－) 誘殺数多(＋)

作　物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	炭疽病	やや多	多	並(±)	並(±)	降水多～並(＋)	
	カンザワハダニ	やや多	やや多	やや多(＋)	やや多～並(±)	気温高(＋) 降水多～並(－)	ほ場調査 茶業研究所 多(＋)
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多	やや多(＋)	やや多～並(＋)	気温高(＋) 降水多～並(－)	ほ場調査 茶業研究所 やや多(＋)
	チャノコカクモンハマキ	やや少	並	やや少(－)	やや多～並(±)	気温高(＋) 降水多～並(－)	ﾌｪﾛﾓﾝﾄﾗｯﾌﾟ 合志市やや多(＋) 御船町やや多(＋)
	クワシロカイガラムシ	並	並	やや多(＋)	並(±)	気温高(＋) 降水多～並(－)	
カンキツ	黒点病	並	並	並(±)	並～やや少(±)	降水多～並(＋)	果樹研究所 やや少(－)
	そうか病	やや多	やや多	やや多(＋)	やや多～やや少(＋)	気温高(－) 降水多～並(＋)	果樹研究所 多(＋)
	かいよう病	やや多	やや多	やや多(＋)	やや多～やや少(±)	降水多～並(＋)	果樹研究所 少(－)
	ミカンハダニ	やや多	やや多	やや多(＋)	やや多～やや少(＋)	気温高(＋) 降水多～並(－)	果樹研究所 多(＋)
	チャノキイロアザミウマ	並	並	並(±)	並(±)	気温高(＋) 降水多～並(－)	熊本市河内町のトラップ やや少(－)
ナシ	黒星病	やや少	やや少	やや少(－)	並～やや少(－)	気温高(－) 降水多～並(＋)	
果樹全般	カメムシ類	多	多	－	多～やや少(±)	気温高(＋)	宇城市、合志市、天草市の予察灯　多(＋)

作　物	病害虫名	発生予想		予　想　の　根　拠			備　考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
夏秋トマト	灰色かび病	並	並	やや多(＋)	並(±)	降水多～並 (＋)	
	葉かび病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(－) 降水多～並 (＋)	
	すすかび病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(＋) 降水多～並 (＋)	
	うどんこ病	やや多	並	並(±)	やや多(＋)	降水多～並 (±)	
イチゴ 育苗ほ	炭疽病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(＋)	
	うどんこ病	やや多	やや多	やや多(＋)	並(±)	気温高(－) 降水多～並 (±)	
	ハダニ類	多	多	多(＋)	並(±)	気温高(＋)	
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	並	並	－	並(±)	降水多～並 (＋)	
夏秋 果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	並	並	夏秋トマト 並(±)	夏秋トマト やや多～並 (±)	気温高(＋)	
夏秋 果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	並	並	－	夏秋ナス やや多～並 夏秋キュウリ 並(±)	気温高(＋)	
	アザミウマ類	並	並	－	夏秋ナス, キュウリ 並(±)	気温高(＋)	
野菜類全般	オオタバコガ	やや多	やや多	夏秋トマト 並(±)	夏秋トマト やや多～並 夏秋ナス, 夏秋キャベツ, キク 並(±)	気温高(＋)	フェロモントラップ調査 合志市　並 阿蘇市　並 山都町　多 八代市　多 (＋)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(＋)は発生を助長する要因、(－)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

◎早期水稲

１）穂いもち

（１）発生量：並

（２）根拠

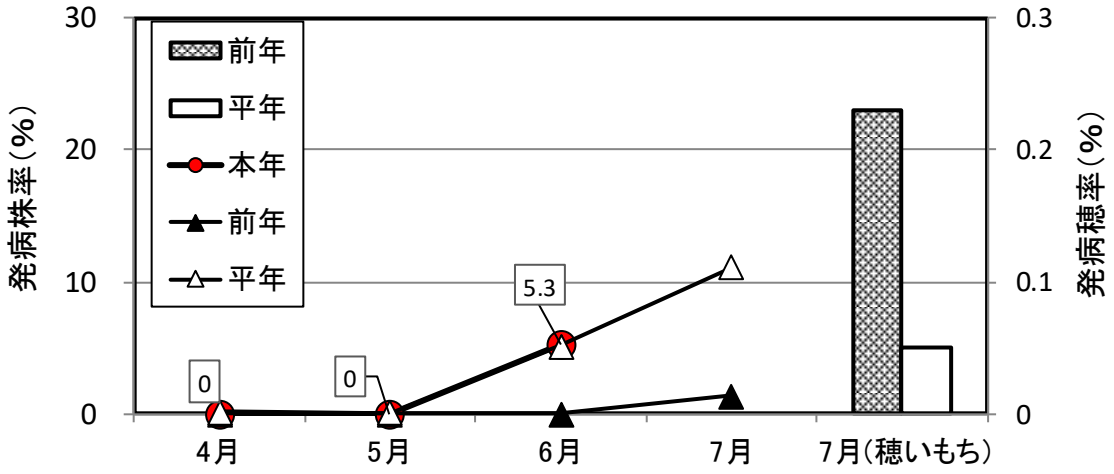
ア　６月の巡回調査では、発病株率 5.3%、発病度 1.5%（発病株率平年 5.1%、発病度平年 1.5%）と、平年並の発生であった（±）。

（３）対策

ア　穂いもちは発生後の防除が困難であるため、出穂前に予防防除を徹底する。

イ　ほ場を観察し、穂いもちの伝染源となる上位３葉に葉いもちの病斑が見られる場合は速やかに防除を行う。

ウ　葉いもちの発生が多い場合は、穂ばらみ後期～穂揃い期に防除を行う。なお、防除後に降雨が続く場合は、穂揃い期の７～10 日後に追加防除を行う。



早期水稲葉いもち及び穂いもちの発生推移

２）斑点米カメムシ類

（１）発生量：多

（２）根拠

ア　６月の巡回調査では、寄生数が 2.2 頭／25 株（７月平年 0.3 頭）と、平年比多の発生であった（＋）。

（３）対策

ア　畦畔など周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するため水稲出穂後には行わない。

イ　防除適期は、穂揃い期とその７～10 日後（乳熟期）である。２回の防除後に生存虫や新たな侵入が認められる場合は、穂揃い期の 14～20 日後（糊熟期）に追加防除を行う。

ウ　詳細は、令和６年６月２５日付発生予察注意報第６号（ https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/251828.pdf ）を参照する。

◎早植え水稲

1）葉いもち

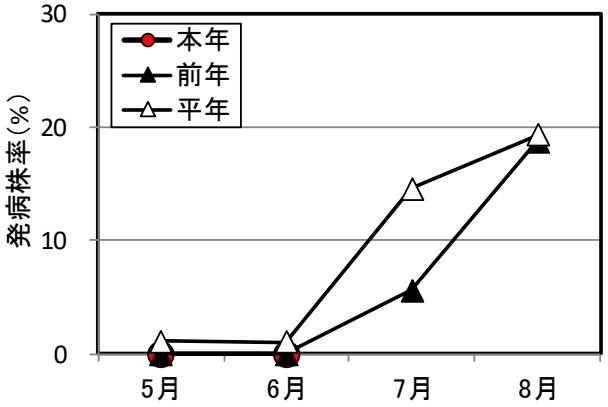
（1）発生量：並

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、発生は認められず（発病株率平年1.0％、発病度平年0.3％）、平年並の発生であった（±）。

（3）対策

ア　ほ場を観察し、発生初期に薬剤防除を行う。特に、いもち病に効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、いもち病発生予測システム（BLASTAM）の感染好適日（病害虫防除所のホームページhttps://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html参照）を参考に、早期発見に努める。



早植え水稲葉いもち発病株率の推移

2）トビイロウンカ

（1）発生量：やや多

（2）根拠

ア　合志市に設置した予察灯及びネットトラップでは、６月22日に初誘殺を確認した。過去10年の初誘殺日平均（６月17日）よりやや遅く、この時期の早植え水稲は、トビイロウンカの定着に適した生育ステージとなっている（＋）。

イ　６月第１半旬～５半旬の誘殺数は17.0頭（平年1.9頭）と平年比多であった（＋）。

（3）対策

ア　水田における発生状況を払落し調査などにより確認する。成幼虫数が要防除密度（７月下旬～８月上旬 20頭／100株）を超える場合は防除を行う。

イ　箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。

ウ　水稲の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

◎普通期水稲

1）葉いもち

（1）発生量：並

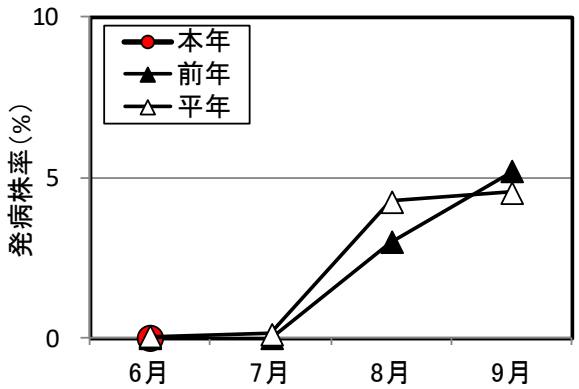
（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、発生は認められず（発病株率平年0.0％）、平年並の発生であった（±）。

（3）対策

ア　ほ場を観察し、発生初期に薬剤防除を行う。特に、いもち病に効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、いもち病発生予測システム（BLASTAM）の感染好適日（病害虫防除所のホームページhttps://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html参照）を参考に、早期発見に努める。

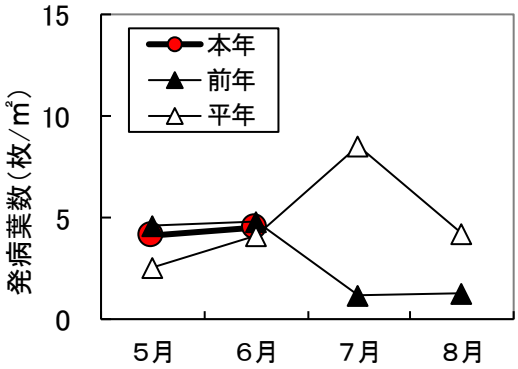
イ　補植用の置き苗は、本田での伝染源となるので、補植が終わったらただちに 処分する。



普通期水稲葉いもち発病株率の推移

２）トビイロウンカ
（１）発生量：並
（２）根拠
ア　合志市に設置した予察灯及びネットトラップでは、６月22日に初誘殺を確認した。過去10年の初誘殺日平均（６月17日）よりやや遅く、本田移植前もしくは移植直後の箱施薬剤の効果が高い期間であった（－）。
イ　６月第１半旬～５半旬の誘殺数は17.0（平年1.9頭）と平年比多であった（＋）。
（３）対策
ア　水田における発生状況を払落し調査などにより確認する。成幼虫数が要防除密度（７月下旬～８月上旬 20頭／100株）を超える場合は防除を行う。
イ　箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。
ウ　水稲の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

◎茶
１）炭疽病
（１）発生量：やや多
（２）根拠
ア　６月の巡回調査では、発病葉が 4.5 葉／㎡（平年4.1葉／㎡）と、平年並の発生であった（±）。
イ　向こう１ヶ月の気象予報では、降水量が平年比多～並の予報である（＋）。
（３）対策
ア　摘採残葉に発病が見られる場合は、三番茶萌芽期から開葉期に防除を行う。
イ　三番茶を収穫しない園では、二番茶摘採後になるべく早く深刈り、浅刈り等により伝染源となるり病葉の除去に努める。
ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



炭疽病の発病葉数の推移

2）カンザワハダニ

（1）発生量：やや多

（2）根拠

ア　6月の巡回調査では、寄生葉率 3.5%（平年2.2%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

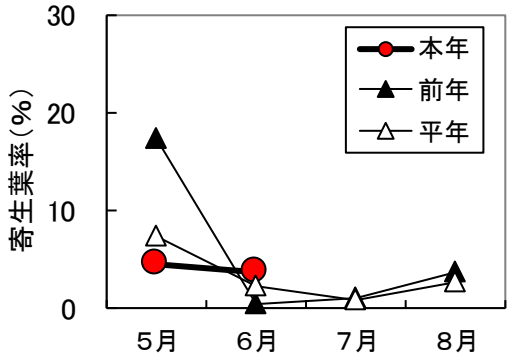
イ　茶業研究所（御船町）の6月第4半旬の調査では、寄生葉率59.0%（平年2.0%）と平年比多の発生であった（＋）。

（3）対策

ア　発生密度が高い場合は、収穫前使用日数を考慮のうえ防除を行う。なお、規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

イ　摘採直前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



カンザワハダニ寄生葉率の推移

3）チャノミドリヒメヨコバイ

（1）発生量：やや多

（2）根拠

ア　6月の巡回調査では、被害芽数9.9本／㎡（平年3.1本／㎡）と平年比やや多の発生であった（＋）。

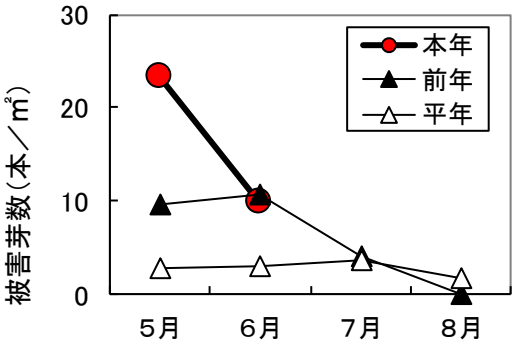
イ　茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、6月第4半旬の捕獲頭数が26頭／10ヶ所（平年21頭／10ヶ所）と平年比やや多の発生であった（＋）。

（3）対策

ア　摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後に防除を行う。

イ　発生が多いほ場では、他の害虫との同時防除ではなく、ヨコバイを対象とした追加的な防除を行う。

ウ　詳細は、令和6年5月31日付発生予察注意報第5号（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/249968.pdf）を参照する。



ﾁｬﾉﾐﾄﾞﾘﾋﾒﾖｺﾊﾞｲ被害芽数の推移

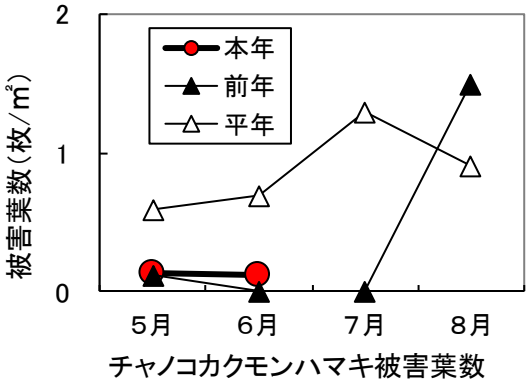
4）チャノコカクモンハマキ

（1）発生量：やや少

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、被害葉数0.1葉／㎡（平年0.7葉／㎡）と平年比やや少の発生であった（－）。

イ　フェロモントラップ調査では、６月第１～４半旬の捕獲頭数が、合志市は268頭（平年181頭）と平年比やや多の発生であった（＋）。
御船町は195頭（平年122頭）と平年比やや多の発生であった（＋）。



（3）対策

ア　各茶期の摘採直後に若齢幼虫をねらい防除を行う。

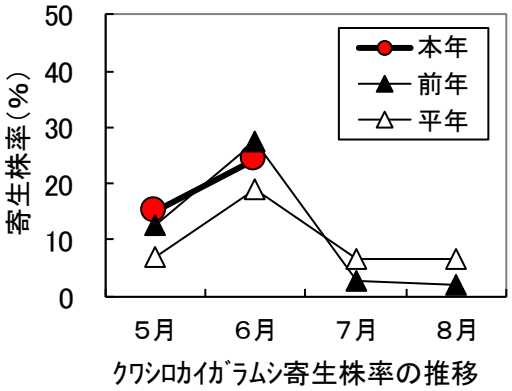
イ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

5）クワシロカイガラムシ

（1）発生量：並

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、寄生株率 24.4%（平年 19.0%）と平年比やや多の発生であった（＋）。



（3）対策

ア　園内の発生状況をよく観察し、ふ化最盛期（卵塊全体の 60～80%になった時期）に防除する。

イ　アメダス地点の有効積算温度シミュレーションによる第二世代ふ化最盛日の予測では平年より 10～14 日程度早い予測であった（６月 20 日現在の気象データから算出）。
今後の天候次第では、ふ化最盛日がさらに早まる可能性があるため、ほ場をよく観察し、防除時期を判断する。なお、最新の情報は熊本県病害虫防除所のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html）を参照する。

ウ　幼虫は、苗木や農機具に付着して分散する場合もあるので、苗木購入、育苗、摘採等管理作業で分散しないように十分注意する。

表　有効積算温度によるふ化最盛日予測

アメダス地点名	第2世代		
	本年	平年	平年比
鹿　北	7月11日	7月22日	11日早い
菊　池	7月2日	7月14日	12日早い
甲　佐	7月4日	7月14日	10日早い
水　俣	6月28日	7月12日	14日早い
上	7月5日	7月18日	13日早い

◎カンキツ

1）黒点病

（1）発生量：並

（2）根拠

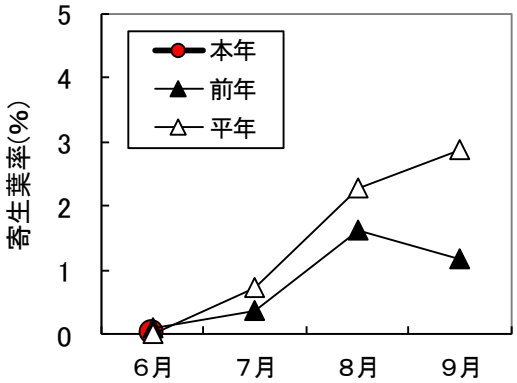
ア　６月の巡回調査では発病を認めず（平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

イ　果樹研究所（宇城市）の予察ほ場において、６月中旬の発病果率16.7%（平年23.8%）と平年比やや少の発生であった（－）。

（3）対策

ア　保菌率が高い直径５～10㎜の枯枝はせん除する。また、せん除後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。

イ　前回の散布から累積降水量が200㎜～250㎜を越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。



黒点病の発病果率の推移

2）そうか病

（1）発生量：やや多

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、発病葉率1.0%（平年0.1%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

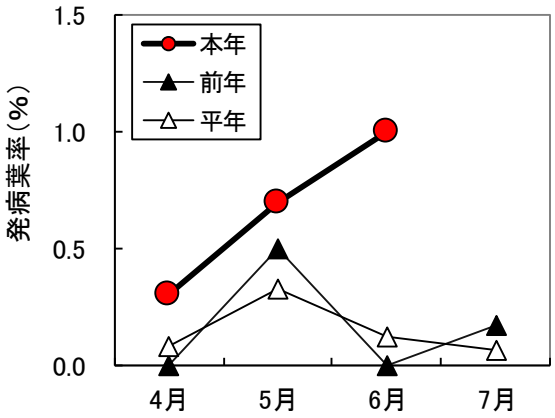
イ　果樹研究所（宇城市）の無防除区では、６月中旬に発病葉率92.3%（平年49.2%）と平年比多の発生であった（＋）。

（3）対策

ア　伝染源の量がその後の発生に大きく影響するので、病葉はできるだけせん除し、併せて園内の通風・採光を図り、雨露が早く乾くようにする。

イ　梅雨末期までの防除が有効であるため、時期を逃さないようにする。なお、果実での潜伏期間は好適条件下で10～15日である。

ウ　摘果時は、被害果の除去に努める。



そうか病発病葉率の推移

3）かいよう病

（1）発生量：やや多

（2）根拠

ア　6月の巡回調査では、発病葉率2.6%（平年1.2%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

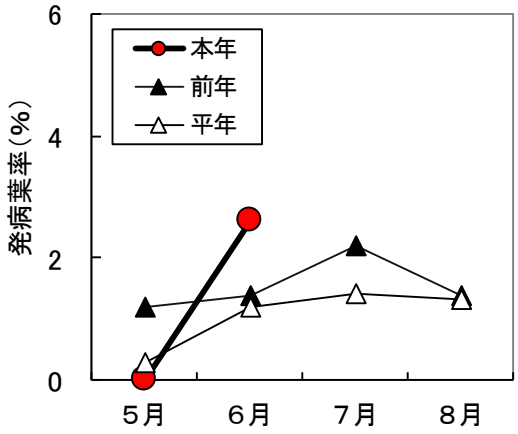
イ　果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、6月中旬の発病葉率1.3%（平年9.6%）と、平年比少の発生であった（－）。

（3）対策

ア　伝染源となる発病葉や枝などのせん除や薬剤防除を徹底し、幼果への感染拡大を防止する。

イ　ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除及びせん除を行う。

ウ　強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



かいよう病発病葉率の推

4）ミカンハダニ

（1）発生量：やや多

（2）根拠

ア　6月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率18.2%（平年12.2%）、寄生頭数8.7頭／10葉（平年6.5頭／10葉）と平年比やや多の発生であった（＋）。

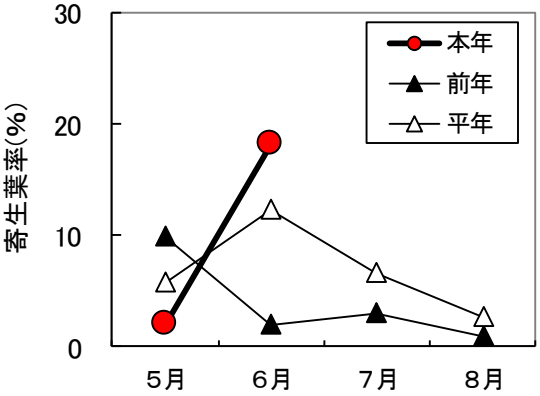
イ　果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、6月第5半旬に雌成虫の寄生葉率61.0%（平年17.8%）、寄生頭数20.7頭／10葉（平年3.6頭／10葉）と平年比多の発生であった（＋）。

（3）対策

ア　定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%または、寄生頭数が5～10頭／10葉に達したら防除を行う。

イ　多発ほ場ではマシン油乳剤を散布し、夏ダニの発生を予防する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ミカンハダニの寄生葉率の推移

5）チャノキイロアザミウマ

（1）発生量：並

（2）根拠

ア　巡回調査では被害果は認められず（被害果率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

イ　熊本市河内町の粘着トラップ調査における６月第２半旬のトラップ１枚あたり捕獲数は0.2頭／日（平年0.4頭／日）と平年比やや少の発生であった（－）。

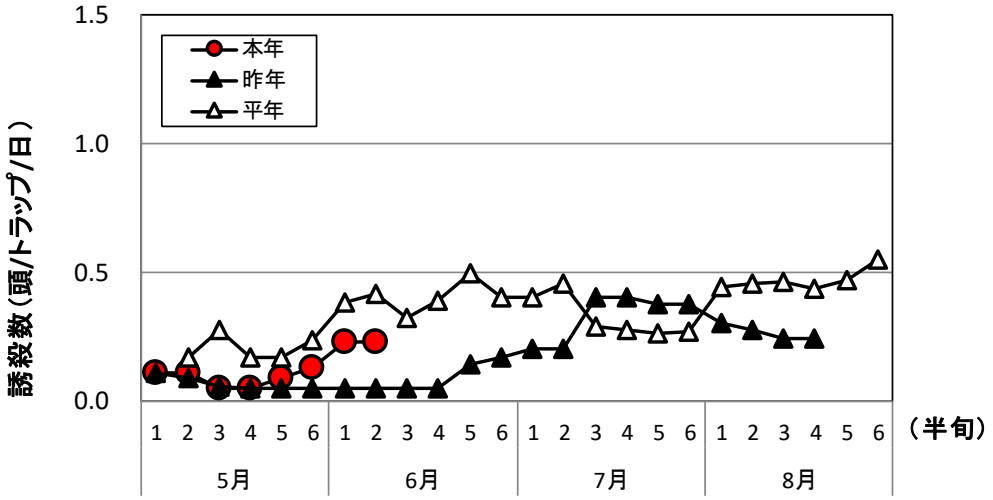


図　チャノキイロアザミウマ誘殺数の推移
（熊本市、黄色粘着トラップ１枚当たり）

（3）対策

ア　平年に比べ羽化最盛期が早い予測となっているため、下表を参考に早めの防除に努める。なお、最新の情報は熊本県病害虫防除所のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html）を参照する。

表　チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果　（6月25日現在）

地点名	本年		平年（10年平均）		平年比	
	第3世代	第4世代	第3世代	第4世代	第3世代	第4世代
熊本	6月16日	7月6日	6月23日	7月13日	7日早い	7日早い
三角	6月23日	7月13日	6月28日	7月18日	5日早い	5日早い
本渡	6月24日	7月13日	7月3日	7月22日	9日早い	9日早い
八代	6月19日	7月9日	6月26日	7月16日	7日早い	7日早い
水俣	6月19日	7月9日	6月28日	7月17日	9日早い	8日早い

イ　発生調査は、果実（100果）を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。

◎ナシ

1）黒星病

（1）発生量：やや少

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、発病が認められず（平年1.4%）平年比やや少の発生であった（－）。

（3）対策

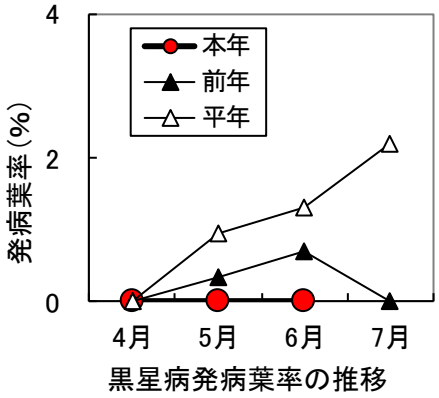
ア　り病葉及び果実は、周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ　「幸水」の果実は、開花60～85日後（６月上旬～７月上旬）に黒星病に対する感受性が再度高くなるため注意する。

ウ　保護殺菌剤による予防散布を心掛ける。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。ＱｏＩ剤（FRACコード11）及びＳＤＨＩ剤（FRACコード７）の年間使用回数は２回までを基本とする。

オ　降雨が多いと発生が多くなるため、梅雨期の防除を徹底する。



◎果樹全般

1）カメムシ類

（1）発生量：多

（2）根拠

ア　４月から６月中旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、各地点とも平年比多（＋）であった。

表　５月上旬～６月中旬の予察灯誘殺数合計

地点名	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
合志市	276	155	178%	585	166	352%
宇城市	3,893	390	998%	8,010	1,374	583%
天草市	3,073	2,899	106%	4,303	2,145	201%

（3）対策

ア　果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。

イ　カメムシ類の予察灯及びフェロモントラップの誘殺数データを熊本県病害虫防除所のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html）に掲載しているので、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や適期防除の参考にする。

ウ　ピレスロイド系殺虫剤は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。

◎夏秋トマト

1）灰色かび病

（1）発生量：並

（2）根拠

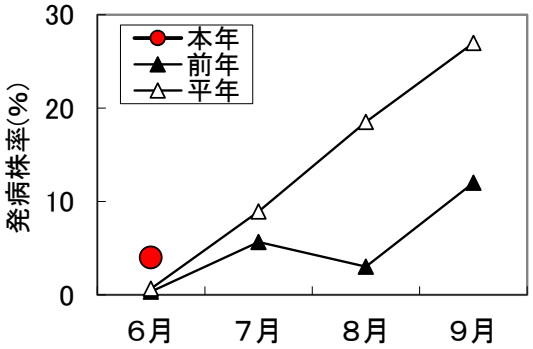
ア　６月の巡回調査では、茎葉で発病株率4.0%（平年0.7%）、果実で発病株は確認されず（平年0.2%）、平年比やや多の発生であった（＋）。

（3）対策

ア　摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ　被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率（茎葉）の推移
（夏秋トマト）

2）葉かび病

（1）発生量：並

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、発病株率0.3%（平年2.2%）と平年並の発生であった（±）。

（3）対策

ア　抵抗性品種でも発病に注意する。

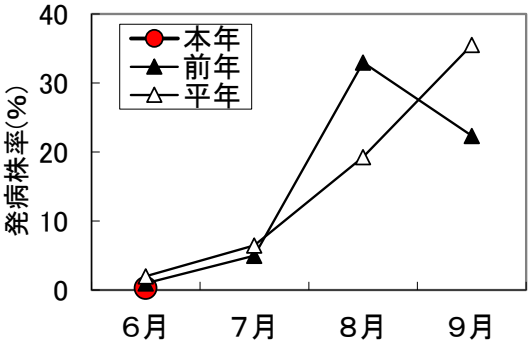
イ　肥料切れで多発するので、適正な肥培管理に努める。

ウ　摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

エ　気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

オ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

カ　被害葉や老化葉は早めに除去する。



葉かび病の発病株率の推移
（夏秋トマト）

3）すすかび病

（1）発生量：並

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、発病株は確認されず（平年0.5%）、平年並の発生であった（±）。

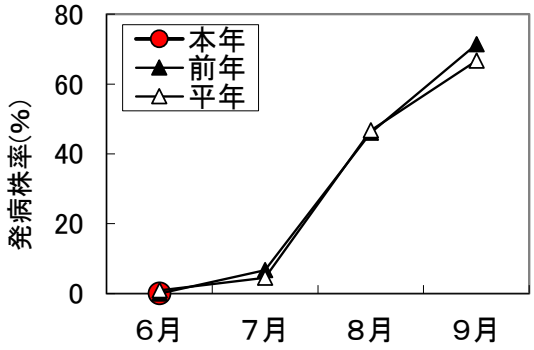
（3）対策

ア　摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ　気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

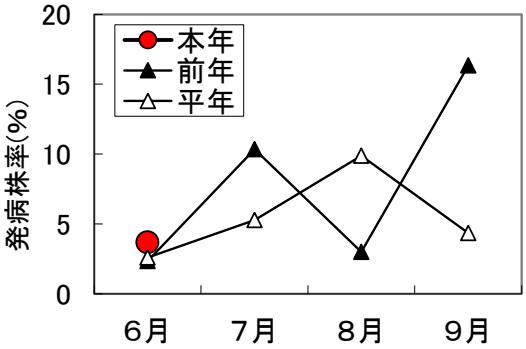
ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ　被害葉や老化葉は早めに除去する。



すすかび病の発病株率の推移
（夏秋トマト）

４）うどんこ病
（１）発生量：やや多
（２）根拠
ア　６月の巡回調査では、発病株率3.7％（平年2.4％）と平年並の発生であった（±）。
（３）対策
ア　発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。
イ　多発すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。
ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病の発病株率の推移
（夏秋トマト）

◎イチゴ育苗ほ
１）炭疽病
（１）発生量：並
（２）根拠
ア　６月の巡回調査では、発病株は確認されず（平年0.0％）、平年並の発生であった（±）。
（３）対策
ア　親株床、育苗床はビニールで雨よけをする（３　防除のポイント等の「**イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう**」を参照）。
イ　頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
ウ　育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。
エ　発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
オ　発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。

2）うどんこ病

（1）発生量：やや多

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、発病株率1.0％（平年0.5％）と、平年比やや多の発生であった（＋）。

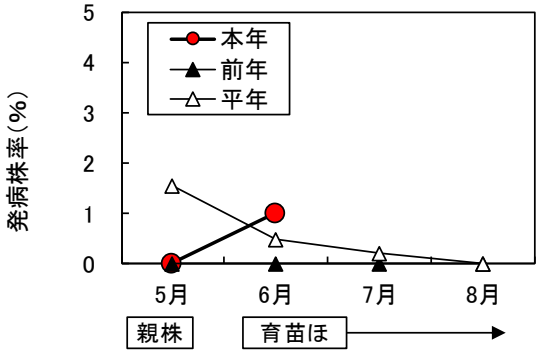
（3）対策

ア　発生していないほ場でも定期的に防除を行い、発生前から予防防除を徹底する（３　防除のポイント等の「**イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう**」を参照）。

イ　発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ　葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病（葉）の発病株率の推移（イチゴ）

3）ハダニ類

（1）発生量：多

（2）根拠

ア　６月の巡回調査では、寄生葉率33.0％　（平年15.4％）と、平年比多の発生であった（＋）。

（3）対策

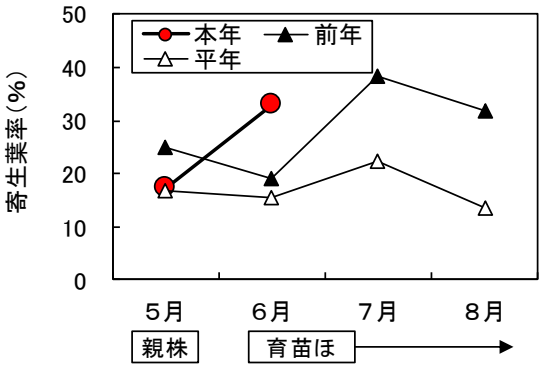
ア　寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。

イ　寄生密度が高くなると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

ウ　薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。

エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ぽまでの栽培期間を通した防除計画を立て、気門封鎖剤等も利用しながら、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

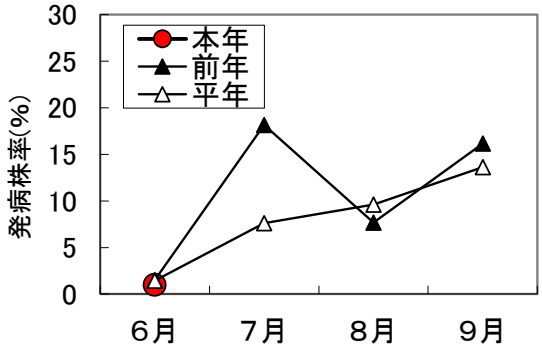
オ　その他詳細は、３　防除のポイント等の「**イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう**」を参照する。



ハダニ類の寄生葉率の推移（イチゴ）

◎夏秋キュウリ（高冷地）
１）べと病
（１）発生量：並
（２）根拠
ア　６月の防除員報告では、平年並であった（±）。
（３）対策
ア　湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、適正な肥培管理と排水に努め、過湿を避ける。
イ　多発生後は防除が困難なので予防防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。
ウ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎夏秋果菜類（高冷地）
１）コナジラミ類
（１）発生量：並
（２）根拠
ア　６月の夏秋トマトの巡回調査では、寄生葉率1.0%（平年1.6%）と平年並の発生であった（±）。
（３）対策
ア　幼虫や成虫などの発育ステージによって有効薬剤が異なる。複数の発育ステージの個体が混在すると防除が困難となるので、初期防除を徹底する。
イ　施設内部の雑草は、主要な増殖源となるので除去する。
ウ　黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



コナジラミ類の寄生葉率の推移
（夏秋トマト）

◎夏秋果菜類（平坦地）
１）コナジラミ類
（１）発生量：並
（２）根拠
ア　６月の防除員報告では、夏秋ナスで平年比やや多～並、夏秋キュウリで平年並の発生であった（±）。
（３）対策
ア　キュウリ退緑黄化病、メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では防除対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。
イ　施設内部の雑草は、生息場所となるので除去する。
ウ　密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。現在発生しているほ場では、早急に防除する。
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤ローテーション使用を行う。

2）アザミウマ類
（1）発生量：並
（2）根拠
ア　５月のキュウリの巡回調査では、寄生葉率2.0％（平年3.6％）と平年並であった（±）。
（3）対策
ア　ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（３　防除のポイント等の「**施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう**」を参照）。
イ　施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。
ウ　粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎野菜類全般
1）オオタバコガ
（1）発生量：やや多
（2）根拠
ア　フェロモントラップによる６月第１～第４半旬の誘殺数は、合志市・阿蘇市で平年並、山都町・八代市で平年比多であった（＋）。

表　各地域のオオタバコガの誘殺状況（６月第１半旬～第４半旬）

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年値（頭）	平年比（%）
合志市（栄）	32.0	41.6	76.9
八代市（鏡）	15.3	4.1	373.1
阿蘇市（一の宮）	4.6	4.1	112.2
山都町（鶴ヶ田）	13.9	8.2	169.5

（3）対策
ア　施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。
イ　１卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。
ウ　老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。
エ　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
オ　詳細は、令和６年６月20日付発生予察技術情報第４号https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/251600.pdf）を参照する。

3　防除のポイント等

トビイロウンカの適期防除に努めましょう

「坪枯れ」等の被害を引き起こすトビイロウンカは、今後梅雨時期を中心に海外から断続的に飛来すると予想されます。箱施用剤の残効期間に留意し、飛来情報やほ場内の密度を定期的に把握することで、適期防除を行いましょう。
（1）若齢幼虫期が防除の適期となる。
（2）水田における発生状況を定期的に把握する。
（3）病害虫防除所が発表する飛来情報や防除適期情報（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html）を参考に、適期防除に努める。

イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう

1　ハダニ類

ほ場をよく観察するとともに、以下の防除対策を徹底し、育苗ほでの発生を防止しましょう。

＜防除対策＞

（１）ほ場周辺およびほ場内の雑草は定期的に除草する。

（２）除去した下葉や株は、ほ場周辺に放置せず適切に処分する。

（３）育苗ほでハダニ類の発生が認められた場合は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。ただし、気門封鎖剤は、卵に効果が低く、残効も短いので、約７日間隔で複数回散布する。

2　炭疽病

保菌親株から苗への炭疽病菌の伝染及び苗での炭疽病菌のまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

＜防除対策＞

（１）親株ほ、育苗ほは必ず雨よけを行う（寒冷紗は雨よけにならない）。

（２）親株ほ、育苗ほにはこれまで本病が発生していないほ場を選び、冠水しないように排水対策を講じる。

（３）頭上かん水は避け、株元に手かん水にする。

（４）ランナー発生前から予防的に薬剤防除を行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。

（５）発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

3　うどんこ病

梅雨時期は発病に好適となり、この時期に発生が多くなると秋期の発生が多くなります。本ぽ定植後の発生を抑制するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

＜防除対策＞

（１）発病葉および不要な下葉は早めに取り除き処分する。

（２）早期発見のため、発生しやすい葉裏まで丁寧に観察する。

（３）薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

（４）薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

（５）気温が高い夏期は病徴が見えにくくなるが、定期的に予防防除を行い、新葉への感染を防ぐ。

施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう

1　野菜のウイルス病まん延防止について

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

そこで、ウイルスを保毒した微小害虫のまん延を防止するため、栽培終了後に密閉処理を行い、まずは植物体を完全に枯らしましょう。さらに、１０日以上処理を継続することで、確実に微小害虫を施設内で死滅させましょう。

◎密閉処理による微小害虫防除のポイント

（１）微小害虫（成虫）は、絶食状態では１日以内に死亡する。そこで、施設内の微小害虫を死滅させるため、施設内の雑草を除去し、作物を枯死させることで、植物を摂食できない状況を作る。

（２）施設内の微小害虫が施設外へ飛び出さないよう、施設は被覆ビニル等でしっかりと密閉する。

（３）密閉する日数は、害虫の習性や寄生部位等を考慮して決める。

・コナジラミ類の終齢幼虫は、株が完全に枯死しないと生存、羽化する場合がある。

・ミナミキイロアザミウマの蛹は、土の中にいて植物を摂食しないため、株の枯死と関係なく生存する。蛹期間が、20℃で約７日であるため、密閉処理は、植物体が完全に枯れてから10日以上続ける必要がある。

（４）悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤[注1]の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。

（５）密閉処理の途中で施設を開放すると、微小害虫が野外へ逃げ出すため、施設内の片付けは、密閉処理期間を過ぎた後に行う。

注１）令和６年６月27日現在において使用可能な薬剤は以下のとおり

・カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）

・クロルピクリンくん蒸剤（商品名：クロピクフロー）

※クロルピクリンくん蒸剤のうち使用できるのはフロー剤のみ

クロピクフローはメロン（漬物用メロン）には適用外

◎野良生えトマトの除去を徹底しましょう

密閉処理を行っても、ハウス周辺に野良生えトマトがあると保毒虫が残る可能性がある。そのため、ハウス周辺の廃棄トマトは早めに土中に埋めるなど適切に処分する。

Ⅲ　【その他の病害虫】

作　物	病害虫名	発生予想 平年比	発生概況及び注意すべき事項等
早期水稲	セジロウンカ	やや多	巡回調査は、平年比多（＋）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる６月１半旬～６月５半旬までの誘殺数は、平年比多（＋）。
早期・ 早植え水稲	紋枯病	やや多	巡回調査は、平年並（±）。 気温は平年比高（＋）。降水量は平年比多～並（＋）。 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤防除を行う。 （要防除水準：穂ばらみ期の発病株率20%）
早植え・ 普通期水稲	ツマグロヨコバイ	並	巡回調査は、平年並（±）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる６月１半旬～６月５半旬の誘殺数は、平年並（±）。
	ヒメトビウンカ	やや多	巡回調査は、平年並（±）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる６月１半旬～６月５半旬の誘殺数は、平年比多（＋）。
	セジロウンカ	やや多	巡回調査は、平年並（±）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる６月１半旬～６月５半旬の誘殺数は、平年比多（＋）。
	コブノメイガ	並	巡回調査は、平年並（±）。 合志市に設置したフェロモントラップによる６月１半旬～６月５半旬の誘殺数は、平年比やや少(－)。 コブノメイガに効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、発生に注意する。
茶	チャノキイロアザミウマ	並	巡回調査では平年並（±）。 粘着トラップ調査では合志市で平年比少（－）。 新芽が加害されるため、萌芽～１葉期に防除する。
	チャノホソガ	並	巡回調査では平年並（±）。 フェロモントラップ調査では、 合志市で平年比少（－）、御船町で平年比やや少（－）。 ほ場を見回り発蛾最盛期から７～10日後の若齢幼虫を対象に防除を行う。
	ツマグロアオカスミカメ	やや多	巡回調査では平年比やや多（＋）。 防除員報告では平年並（±）。 常発園、多発園では、萌芽期を重点に防除する。
カキ	炭疽病	並	防除員報告は平年並（±）。 降水量は平年比多～並（＋）。 梅雨期は発生が多く、まん延しやすい時期であり、予防防除に努める。
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	防除員報告は、平年並（±）。 適切な肥培管理を行う。
夏秋 キュウリ (高冷地)	うどんこ病	並	防除員報告は、平年並（±）。 発生を認めたら、直ちに薬剤散布を行う。

作　物	病害虫名	発生予想 平年比	発生概況及び注意すべき事項等
夏秋 キャベツ	黒腐病	並	防除員報告は、平年並（±）。 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
	コナガ	並	防除員報告は平年並（±）。フェロモントラップによる６月第１～４半旬の誘殺数は、阿蘇市、山都町で平年比少（－）。 ジアミド系殺虫剤を使用したほ場で発生が認められた場合は、他系統の薬剤で防除する。
野菜類全般	ハスモンヨトウ	並	巡回調査では、イチゴで平年並（±）。 防除員報告では、夏秋トマトで平年比やや多～並、夏秋ナス、イチゴ、キクで平年並、アスパラガスで平年並～やや少、サトイモで平年比やや少、ナス，アスパラガスで平年並～やや少（±）。 フェロモントラップによる６月第１～第４半旬の誘殺数は、合志市、阿蘇市、山都町、八代市で平年比やや少（－）。 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では防虫ネットで侵入を防ぐ。
【野菜病害虫の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める（病害）。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			

Ⅳ　その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。
また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎　詳しい内容等については　病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。
※なお、本文はホームページ「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」上に掲載しています。